

気づけばとんでもない歳のおっさんになってしまっているわけだが。バブル崩壊後とはいえ、今から考えるとイケイケで粗雑でなんでもありな時代。まだなにものでもないのに、なにものにもなれそうな気がした。もうあんな時代はやってこないのかもしれない、と思うと少し寂しい気分にもなる。いまの僕らくらいだった星光の先生方も僕らのことをしょうもないと思って見られていた気がしなくもないが、とにかく時代は無情に過ぎていく。

そんななかで星光の面々で今でも集まることがあれば、仕事のこと、プライベートのことを忘れて中高生に戻れるから不思議である。それこそ今ではちょっとアウトな伝説で盛り上がる。問題なのは、そんな伝説は中高時代の昔話に限らず、今でもなんだかんだやらかした話がそこら中に転げ落ちており、少年時代に戻って笑い飛ばせる、そんな稀有な場が星光なのだ。

震災の影響で中学受験の番狂わせが起こった僕らの代は色々な意味において異様だった。神戸と岸和田が天王寺で出会うという文化摩擦、昨日までカトリックのことなどつゆ知らずに学院生活は始まった。おそらく勉強好きが多かったのだと思うが、ガリ勉と思われるのを忌み嫌った。今もそんなちょっとした美学に酔っている自分たちがいる。定期テスト前には堂々と手ぶらで雑談を楽しむ。前日はひたすら遊んでいた自慢をする。「ガリって」いる学友を冷やかして喧嘩になりかけたりもした。習ったばかりの難しい言葉を使おうもんなら、ペダンチックとして断罪される。今でも問題になる日本社会の「空気」の重さみたいな話だと思われる、それは違いますよと言いつつ返したくなる爽やかさが共存していたのだが、まあ素直に反省したほうがよさそう。そういえばフランスでは昼食中に仕事の話をする人は嫌われる。なにか同じ匂いがするものだ。

南部と黒姫はそんな星光を、とてつもなく濃い星光を、余すことなく感じられる舞台装置であった。OBと教師陣は楽しそうに酒盛りしているのに、学生は寝ることを強要される不条理。そんななかで、こっそり悪巧みをして遠くのコンビニに買い出しに行ってみたり、寝タバコ (!) 見つけて速攻大阪送りになってみたり。どの時代のどの学校でもいくらでもあるような話なのだろうが、一生懸命にバカをすることの大切さ、不条理でもルールはルールで、一休さんではないけれどそのなかでどう自由に生きられるか、そんなことを学んだように記憶している。なぜ毎朝追い立てられて目をこすりながら箱根体操をせねばならなかったのか、未だに誰も理解はできないが、もう一度あの非日常を生きてみたいとも思うのだ。思春期の有耶無耶と相重なって、あの窮屈な中からの自由の模索は、結局のところ僕らの原点なのであろう。

そういえば、庶民集という雑誌があった (写真参照)。46期でスクールフェアといえばこれだった。有志による文芸同人誌を装った思春期の火薬庫のようだった。おそらくみんなものが書きたくて仕方がなかったのだと思う。庶民感がむしろゼロで、その時々を読み物の影響がよく感じられる文体・テーマで、皆思い思いの小説やエッセーを綴ったものだ。小っ恥ずかしすぎて読み返すのには勇気がいるが、「あんなのに」エライ熱量を注いだのはやっぱり青春と呼ぶのだろう。庶民集復刻版やりませんか？

思えば生徒であれ教師であれ、なにか学校という枠組みを超えたところでの人情は実は厚かったように記憶している。残念ながら退学 (あるいは転勤) などになっても、サッカーをしに学校に遊びに来たり、高一終わりの早すぎる修学旅行には参加したりと、おおらかなのだ。

今の星光は建て直しされてしまい、教会も前庭もなくなってしまった。僕らの頃は早弁してさらに食堂で裏メニュー・カレーそばを頼むのがきまりだった。あの薄暗い古びた校舎で学んだスキルが生きているのかどうかはなんとも言えないが、ガチガチな中でおおらかで、暗くて明るいあの空気が、今も僕らを結びつけてくれている、ような気がしている。

(46期生)



「庶民集」のページ。とても懐かしい。